

『くちの学景』 みち文風

青森県弘前市

太宰治と 津軽

弘前大学教授◆長野隆

海

抜千六百メートル余の霊峰岩木山は津軽のいたる所から眺められ、眺める位置によってその姿を変えていく。弘前市から眺められる三つこの山容は、太宰が作品『津軽』の中で「いかにも重くどっしりとして、岩木山はやはり弘前のものかもしれない」と形容したように、この城下町を西の方から優しく抱きかかえている。冬の津軽の代名詞と化した地吹雪が弘前にないのも、この霊峰の恩寵によるものだ。西海岸から吹きつける寒風が、何の遮りもない津軽平野を駆け抜ける時、地吹雪は生じる。太宰の生家のある北津軽の金木あたりは、だから、そのメッカと言っている。金木から遠望される岩木山について彼は「富士山よりもっと女らしく、十二単衣の裾を、銀杏の葉をさかさに立てたようにばらりとひらいて左右の均斉も正しく」と、ひと筆で形容してみせたが、これは、極北の地に育った作者が自身の可憐な故郷に寄せた、最も美しい描写の一コマである。

「ここは津軽人の魂の拠りどころである（『津軽』）とした弘前で、太宰は三年を過ごした。ある春の夕暮、弘前高校（現弘前大学）の学生であった彼は、弘前城の本丸近くから岩木山を眺望し、ふと脚下に、夢のようにひっそりと眠る、古雅な弘前の町を発見する。彼はその風情を万葉の隠沼に喩え、「この町の在る限り、弘前は決して凡庸のまぢでは無いと思つた」という。隠沼とは草木などに隠れて見えない沼を指すが、たぶん、城の外堀を両岸から包む深い木立の向こうに広がる、低い武家屋敷の町並を言つたのだらう。北津軽の幾分成金的な名家に育つた太宰が、その実家への屈折した反逆を試みていた頃の、もう一つの津軽の風景の発見であった。